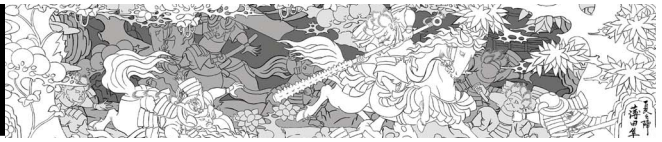


宮本地車噺



第18回「忠臣蔵～元禄赤穂事件～ その二」

前号からの続き) 御家再興が絶望的となり仇討ちを決めた大石内蔵助は同士を募りました。御家再興優先と考える家臣には、これに賛同しなかった者も多かったようです。内蔵助は討入する日は「上野介が在邸確実でなくてはならぬ」と考え配下の大高忠雄を上野介の茶会にしばしば招かれる茶人山田宗偏^{そうへん}に弟子入りさせました。そして十二月十四日に吉良家の茶会が開かれることを聞き出し、この日に討ち入る事を決定しました。討入の同士達は江戸に潜伏していましたが、討入までの期間に脱盟する者もありました。最後まで残った同士の数は四十七人でした。元禄十五年十二月十四日(実際には十五日未明であったが当時の慣習として午前六時あたりから翌日としていた為) ついに討入となりました。四十七士は吉良邸の表門、裏門の二手に別れ邸内へと入って行きました。彫物では表門の様子を再現しています。梯子がかかっているのが見て取れます。また松には雪が積もっている所まで刻まれています。吉良邸に討ち入った義士たちは上野介を屋敷の隅々まで探しました。なかなか見つかりませんでし



たが、台所横の炭小屋に上野介を発見しました。この後四十七士は本懐を遂げることとなります。上野介の首を内匠頭の墓前に捧げる為、吉良邸を出発し浅野家菩提寺である泉岳寺へと向かう赤穂の義士達。追っ手に備えてしっかりと陣形を組み進んでいきました。朝日が輝き始めた頃、一行は両国橋を渡りました。その時、馬に乗り義士の前に駆けつけてきたのは江戸町奉行である服部彦七でありました。義士達が身構えるのを制した内蔵助に服部は言いました。「役目の上から物申す。本日は十五日吉例の登城日であるから異型な者を通すことは出来ぬ、または表通りの通行も許さぬ。道を変えて引き上げよ。」これは服部彦七の温情によるもので追っ手が来た際に狭い道ならば少人数の義士達でも戦えるであろうからそうしたほうが良いと暗に知らせたのでありました。一同は一度引き返し道を変えて無事泉岳寺へと到着し墓前に首級を備え仇討ちを報告しました。この討入行為は義拳として江戸の侍や庶民から賞賛を受けました。義士達の処分については当時かなり議論が交わされたようです。しかし翌年、義士達は切腹を命じられてしまい、遺骸は主君内匠頭と同じ泉岳寺に埋葬されました。



実は赤穂藩浅野家の家臣は300名以上いたそうです。このうち討入に参加したものが46名(足軽身分の者を加えて四十七士)でした。討入に参加した浪士の子弟は各藩から争って招聘される一方で参加しなかった者やその子孫は不忠者と蔑まれ味噌や醤油なども売ってもらえず仕方なく名を変えひっそりと生活したと伝えられています。しかしながら、この不忠臣と呼ばれた人たちは誰一人として討入の計画を一切漏らしていませんでした。